

「清十郎ついでんやっこはいかい」の語彙：
句に見られる語彙

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道井, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23706

「清十郎ついでんやっこはいかい」の語彙

一句に見られる語彙

序

「清十郎ついでんやっこはいかい」は、奴詞、奴の発想によって作られた、東國語資料としての俳諧として知られているものである。その特色の概要については、萩原羅月氏の「清十郎ついでんやっこはいかい」の解題や俳諧大辞典等々のべられている。「清十郎ついでんやっこはいかい」（このあと「清十郎ついでん」と略記する）は時期的には、貞門俳諧の末期から談林俳諧の初期にあたり、兩派の特色をなんらかの形で有している。（註1）「清十郎ついでん」とほぼ同時期に、卜養の追善独吟百韻や、如貞の愛子追悼独吟等々の追善ものと言えるものがあり、一方に、芭蕉の「貝おほひ」等の「やっこはいかい」ものと言えるものがある。これらの追善ものや「やっこはいかい」ものは、流行的にもはやされた節も考えられる。「清十郎ついでん」は、そのような時代的な背景をもとにして成立したものである。「お夏清十郎」の事件も当時話題になった世話であり、歌舞伎にもとりあげられた節がある。（註2）西鶴や近松門左衛門によって取りあげられたことを考えると、かなり世の中をにぎわかした事件と考えられる。その事件の主人公を「清十郎ついでん」というように表題にとり入れている点など、「清十郎ついでん」は際的な性格をもっている。このような特色をもっている

道 井 登

「清十郎ついでん」の語彙の特色を「清十郎ついでん」の句を中心にして考察してみたい。

俳諧の語彙を考える場合、物語や日記隨筆等々の語彙と違って、式目や付合などの俳諧作法によって、かなり制約されていることを考えねばならない。それだけに一つの際立った特色もあらわれると考えられる。「清十郎ついでん」の場合には、さらに「ついでん」、「やっこはいかい」という特色がかせられている。「清十郎ついでん」の語彙を考える場合、以上のような視点がすでに用意されていると言える。それらの視点から洗われる特色をよりはっきりさせるために、俳諧類般集の語彙との比較を試みてみたい。（毛吹草や御衆、俳諧便船集などがあるが、語彙数では俳諧類般集が最も多いので、類般集を比較の対象のものとして選ぶのが妥当と考えるのである。）

(一)

語彙を考察する前に、式目について少し検討してみたい。式目について解説された書物「俳諧初学抄やはなひ草その他」も多くあり、式目は「連歌から俳諧にいたる間に、歴史的変遷を遂げて」（註3）おり、また「俳諧諸流派によっても若干の相違があつて一定しない点」もあるのでこの方面の研究として、すでに、睡庵康隆、中村俊定氏のご研究（註4）があるので、それによって比較を試みる。式目の「月」「花」の定座について比較してみると次のようになる。

やうな・やうなる	たい (希)	ない (打)	べい (意)	ぬ・ぬる(完)	たる	ける (過)	し (過)	む(ん) (推)	らん (推)	り (完)	ず・ぬ(打)
2	1	2	2	1	2	1	3	1	5	2	3
(3)	(4)	(10)	(6)		(3)		(1)			(1)	(3)
0	0	0	0	2	1	0	6	2	5	1	6

まい	う (ふ)	ごとし	ます	た (過)	だ (断)	そろそろ そろろう	ぢや	べし	らし	じ(打、推)	つる (完)	らる
0	0	0	0	7	3	0	0	0	0	0	0	1
(4)	(1)	(1)	(1)	(25)	(13)	(5)	(1)	(2)				(2)
0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	1	0

追善独吟の助動詞は例えば「さえぬ霜月」、「とりし硯」、「なみだをながすらん」、「すゞしき世界なるらん」、「何しになげくべき」、「軒端の雪と人もさえそろ」、「なきしすゝ目腫ぬる」、「今は得たるせんぼう」、「露の身のじゃくは雨じゃと」等のような文語のものである。それに対し「清十郎ついせん」の助動詞は、例えば、「ういわざだ」、「豆腐腐るべい見せ」、「曆のやうな文」、「ののちめた舟」、「かすまない」のやうな口語のものとして、「きへやらす」、「止めらん、くどくらん」、「待ぬる夕暮」、「しやばけたる雪」、「しもときしふんどし」、「牛を引くなり」等のやうな文語がある。「清十郎ついせん」の「だ、べい、ない」は東国語をあらわす助動詞であり、「た、たい、やうな」は東国語とは限らない一般の口語の助動詞である。このような東国語、口語の助動詞は、助動詞全体の器⁷%にあたり、助動詞の約半数を占める。追善独吟にはこのやうな特色は全くない。「そろ、じゃ」が各一語あるくらいであるが、それも京詞である。これらのことから、「清十郎ついせん」の句作りに、かなり自在に口語がとり入れられ、それに「やっこはいかい」としての東国語的特色をもちこむうとしてゐる態度が見えるのである。

このことは助動詞のみならず、動詞の語彙においても見られることである。動詞総数15語中接頭辞を有し、訛音化したものが約18%ある。追善独吟では「うち習ふ、とりつむ、うちくもり」の三語のみであり、それと比較すれば、「清十郎ついせん」に口語化の現象が強く見られるのである。(追善独吟の三語のうち一語は「うちくもり也」という名詞形である。)(「清十郎ついせん」の接頭辞のついで

た形のは次のようである。() 中の語は類船集の付合の語、または類船集中の語である。)

(A) 「。つー、つんー 5語、つとぶ (飛一壺)、つっ立 (春) (立春)、つっさかふ (榮一園、家)、つんもる (漏水)、つん残る

。とつー 2語、とつちめる、とつつく、

。うちーうちー 2語うちぬめる (ぬめり)、うच्चやる、

。ぶつー ぶんー 5語 ぶつきれる (きれぬ小刀)、ぶん向

居、ぶんのぼる (登一月)、ぶんでる ぶんのる (乗一船)

。ひつー 2語 ひつぞ引 ひつ契る (契一文、いもせ)

。かんー 1語 かんなく (啼)

。まー 1語 まくろふ (喰)

。おちー 1語 おちちなふ

。しゃー 1語、しゃばけ(たる) (しゃつたら一名詞)

その他の動詞は

(B) 「(伏) ほゆる(伏)、ほざく、ほへ(た)、ねまる、にじる、ひからめく、のちちめ(た)、だす、でる、ふりで(た)、(降出)、いぶす、いけ(ない)、すい(た)、のめり出、明る、あけろ、」

これらの語の用例は、「おなつの空にほゆる郭公」、「名残おしいとほざくたわれ女」、「夜ひといいへた松虫の声」、「端居にねまり呑は大酒」、「霞そめてやにぢる千話文」、「池の面にてる夕月のひからめき」、「どつと沖にのちちめた舟」、「豆腐うるべい見せを出す袖」、「是もふりでた春の長雨」、「喰どいけない焼立の食」、「それすいた吹尺八や止めらん」、「ふら〜と市のか

りやをのめり出、「六条の宿のと明る爰あける」であり、(A)の接頭辞化の動詞とともに俗語的口語体の動詞である。

(B)「何」澄(月澄)、呑(呑酒) 引く(引く)、きえや
ら(ず) (消えぬ雪)、てる(照月) 狂(狂)、打(打)
吹く(吹一笛、吹笛)、霞(霞) 望む(望一官位、名人の
芸)、うつる(移)、かわる(替)、かく(かく一瘡)、た
まく(扣一戸) よぶ(呼一友千鳥) よびうけ(た) (呼)、
読む(読、読歌)、かへす(返す衣) 飛おりる(飛一鳥)、
とく(解一下紐)、くだす(下一腹中)、置あへ(ず) (置
霜)、はやり出(はやる一今様)、きざむ(刻一昆布)、開く
(開一花)、くどく(口説一千話文)、おもふ(思ふ一人一君)、
こぼるゝ(こぼるゝ一泪)、思ひきる(おもひ切最後)、聞く
(聞一歌)、ふる(触)、ひねる(捻一小歌一ふし)、待つ
(待一客、友)、ひろふ(拾ふ)、

(B)「何」見る、かへす、あぞぶ、する(ず)、きめ(ける)、う
る(賣)、おこる(興)、来る、見申す、いける(生)、なぐさむ、
聞えくる、喰ふ、こむ(込)、落す 寄集まる、こまる(困)、言
ふ、洗ふ、ぬけ果つ、うみおとす、ぬく(抜)、やる、しむ(染)、
いさむ(勇)、まかす(任)、

(B)の何は類船集の中に付合の語としてあるもので、動詞全体の約
38%になる。(B)の何は一般的な動詞である。(B)の何は俳諧としての約
一般的に用いられる動詞と言える。この(B)の何の用語中、追善独
吟と同じくするもの「消ゆ、喰ふ、呑む、見る、乗る、出る、待
つ、生(置)、落す、啼く、はやる、言ふ、洗ふ、打つ、望む、申
す、(祈る)」等があり、動詞全体の約15%にあたる。このことは
式目においての蕉風に合致する事と考えあわせて、俳諧における基

本的な語彙の性格の一面を示していると言える。このような俳諧に
おける基本的な語彙からはずれる(A)、(B)の何の用語が、「清十郎つ
いせん」の特色をあらわす語彙と言えるのでなかるうか。それらの
語彙が「清十郎ついせん」において約31%にあたることは、「つ
いせん」もの、「やっこはいかい」もの特色を示していると言える
と考える。追善独吟の特異な語彙と思われるものは「群集する、に
ぎあふ、(衆も)きか(ざる)、嗅ぐ 継ぎ接ぐ 喰る 踊りまわ
る」等であるから、「追善独吟の動詞の4%」一層、特色は明らか
になる。しかし、「清十郎ついせん」の句作りの基本的態度としては、
俳諧の基本的用語を基にしていると言える。東国語の特色を示す
接頭辞の訛音化された語をみても、訛音化された接頭辞をはずした
単語として見た場合その単語で、類船集にのっている単語は10語に
およぶ。これは、接頭辞のついた形の単語の50%にあたる。例えば
「つとぶ一飛、立春一立、つさかふ一榮、つんもる一漏、ぶん
のぼる一登 ぶんのる一契、かんなく一啼」等である。このこと
は、俳諧用語としての単語を接頭辞、訛音化させて用いている傾向
の強いことを示す。また、接頭辞および訛音化が中央語へ広がって
いく過程の様相を示していると考えられる。

次に形容詞と形容動詞についてであるが、

(A)「さむっこき里 ぬるっこき清水 すっこき此濁酒 ひやっこ
き水 (むしっこさ)」

(B)うい、こいしい うれし(嬉)あふ夜、文の返事、 寒き、
永き、てっかい 名残おしい(名残おしい一惜)、なき(亡跡)、
とうとい(尊き寺)、

(C)「いそがしげに おぞやかな いかなる、あだなる がいな、」

①の「うっこい」は岩波国語辞典によれば、「名詞につけて形容詞を作る」と説明しているが、そのような用例は見あたらない。すべて形容詞の「さむし、ぬるし、すし……」に「うっこい」のついたものであり「寒、冷、酸、甘」等の語にのみついているところに特色がある。このような「うっこい」形の形容詞は追善独吟にはない。追善独吟の形容詞には「なし(なき) 4語、うし(うき世)、もろし、露けし(露けきふね)、すどし(すどしき世界)、つめたし、ながし(ながき夜)、さびし、くらし(くらしき影灯籠)、うれし、深し、わろし(わろき大阻)、みじかし」がある。「清十郎ついでん」の②の形容詞と追善独吟のものは似かよっている。しかし、その使用率は約71%である。「うっこい」が29%あり、促音化による口語体の傾向を示している。

名詞には 俳諧の場合、付合の中心的な語になると考えられる。俳諧の語彙数で名詞がもっとも多くなるのは短詩形であるほかに、付合、式日が作る場合の制限となるからだと考えられる。だから、俳諧の語彙の特色は名詞にあらわれるものと考えられる。その名詞を (1)自然(天象、地形等) (2)動植物等、(3)食物道具等、(4)身体病氣等、(5)地名人名等、(6)建物類、(7)人間関係、(8)社会、文化等、(9)その他、(10)付合によって生じた語に整理し、類船集中にある語、ない語を区別して次に示す。(……線付した語は類船集中に見えない語)

(1)自然(天象、地形等)
おなつ(夏)、空、短夜、星の親ぢの月、田、春風、地こぶ(山)、雪、日、地(の面)、夕月(夕の月)、夏のどうな、か、月、雪の朝、刈田(刈田の面)、つゝ立、(立春)、山々(山)、沖、

浜浦、夜、夜ひと(夜どおし)、露、雨、水、花、春、長雨、秋、夕暮、花の香、

(2)動植物等

若竹、郭公、牛、柳、秋の螢、花、露の小草、草花、千鳥、鯉、五位鶯、園の繡梅、鶯、松虫、海草、

(3)食物道具類

大酒(酒)、小車(車)、船、きんちゃく、尺八、せん刀、伽羅、小船(舟)、玉籠、しも(紐)、ふんどし、夜食、焼立の食、濁酒、昆布、初塩鮭(鱒)、汁之味(汁)、

(4)身体、病氣等

恋のやまふ(恋、やまひ)、唐瘡(唐、瘡)、口、身、血目

玉心の内(心)、どう腹(腹)、耳、ほでぶし(腕)、血腰、

なだ(泪)、そ首(頸、首)、かばね(骸)、

(5)地名人名等

清十郎(ぶし)、おなつ、河原の院、行平、あつもり、小六、さほ姫、源、祇園、清水、奈良、日本、みしま(三嶋)、六条、さつつ坊、伊勢うら、都、

(6)建物類

かりや、海士の菅屋、宿、庭、茶や、

(7)人間および人間関係

しんぼち、茶やのかま、御門徒(門徒宗)、あをがうせんの会花の番(花番)、友、たわれ女、おぢりひげ(ねちるゝ頼髭・髭いぞぞ人)、百姓、やつこ、客、君、子、てゝ、思君、公家方、うかれ女、うち子、

(8)社会、文化関係

囃歌(はやるゝ今様)、清十郎ぶし、学文、沖楽笛、祭、でこ、

どろぼう (盗人) かべぶしん、刀の鍛冶、曆、文、塩汲の桶、詠歌、旅、月見、りうたつ、づくにう、政道、千語文、ふる塚、引出物、三味線、伽、小歌、神、まつり事、焼手、

(9)その他

世、端居、市、里、わざ、こまかしこ、比、あちらこちら、きせち、見せ、町並、神いのり、国名、参内、ならひ、傾城、ものがり、爰、袖のめり(ぬめり)、勅命、八重九重、音骨、四方、よそほひ、情ぶり、なげ、声、草の戸(草戸さし)、哀さ、あと、雨の祈(雨を祈る)、しやつたら(面)、不儀、飢饉、是、やつ、時、かわゆさ、形見、音、折、内、さま、心、参宮、代、

(10)付合によって生じた語——については一番最後に考察してみた。名詞299語中、類船集にある語は約61%である。類船集に見えない、付合語として用いられない一般抽象名詞の「さま、是、時、内、折……」等々の語を除けば、%は高くなる。このことは、「清十郎ついでん」の名詞においても助動詞、動詞の場合と同じように一般的な俳諧用語の枠内にあり、俳諧としての基本的な用語の使用を基盤にしていると言える。それだけに、その枠からはずれた語に「清十郎ついでん」としての特色が見られると言える。それで、特色のある語を整理すると次のようになる。

(1)自然等では、「星の親ち、地こぶ(夏の)どうなか 夜ひとい、」(3)食物道具類では「しも(紐) ふんどし、焼立の食、味」(4)身体 病氣等では「どう腹、ほでぶし、血目玉 血腰 なたそ首」(7)人間関係では「あをがうせんの会、やつこ」(8)社会、文化関係では「囃歌 清十郎ぶし、でこ、どろぼう りうたつ、焼手」(9)その他のところで、一般抽象名詞を除いて、「音

骨、なげ しやつたら、不儀 やつ」がある。

この特色を示す語は名詞全体の約14%である。これらの語のうち「星の親ち、地こぶ ほでぶし 血目玉 血腰 なた……」の大部の語は「やつこはいかい」の特色を示していると言える。しかし「清十郎ついでん」という「ついでん」を示す特色のある語彙は見あたらない。追善独吟の場合には、「西方浄土、雪仏、いまはの時、うき世、露の身野べ、本なみだ、後のかたみ しやうじ料理、五条の寺、蟬の声、とぶらひ、宇治の芝原、ねはん出家、東福寺、焼香、金堂、聖、後生ごと、野火、坊主、別れ、功德の池、はちすの蓮台、南むあみだ、僧、さいの河原 野おくり、観世音、死病、追善 かね、念仏、うれひのみみだ、遺言、黄泉の旅、沙婆、ほうけ経、うら盆の月 とんしや 袖の露 死骸 とんせい 泉涌寺、釈迦 骨舍利 禁断殺生戒、大病、つみ、新発意、仏果、五十年忌 涙」の語があり、名詞全体の32%という高い使用率を示している。追善独吟という特色をはっきり示している。追善独吟の名詞をもう少し抜き出してみると、「歌、からしあへ、扇の絵図、喜撰、霰酒、お茶の湯、ならの大仏、三笠、金堂、双六、将棊、講義、遊行、花柳、かぶき菩薩、胡蝶の戯、お銚子の酒、影灯籠 平家、内裏、神のつな、いはしの汁、二階住、かい餅、すてきね(捨杵)、太鼓、邯鄲の夢 知行 柿団扇、繁昌」等、「清十郎ついでん」における文化、社会関係等にあたる名詞がかなりある。そこで 追善独吟と「清十郎ついでん」の文化、社会関係や食物、人間等の語で対比することのできるものを、対比してみると「かい餅」かべ、豆腐「講義」学文「かぶき、遊行、花柳」傾城「歌」小歌、囃歌、りうたつ、づくにう「お銚子の酒、霰酒、濁酒、大酒」お茶の湯「あをがうせんの会」夕顔、喜撰「行平、あつもり、さほ姫」いはしの味

初塩鱈の汁之味」「太鼓―太鼓」「神のつな―神祈り」「知行―政道、まつり事」「内裏―勅命」「繁昌―劍鐘、つつさかふ代」「新発意―しんぼち」「公家―公家方」「野ぶし、山伏 びんぼうな武士―やっこ、ねじりひげ」(「―」)「―」は追善独吟―清十郎ついでん)等がある。この対比から、これらの世俗的な語彙は俳諧において一般に用いられていたことを示す。このことから、「清十郎ついでん」の特色はなへんにあるかを考える時、「やっこはいかい」の特色は「やっこ用語」の語彙に「やっこ」独特の隠語的な語彙があるのでなく、「山」を「地こぶ」というような「やっこ」独特の発想による隠語的な用い方にあるように考えられる。(「むさし」を「さむっこき」というのも同じである。)、また、追善ものとしての特色は追善独吟のように顯著ではない点から考えて、「清十郎ついでん」の特色は「清十郎がいもせの中とぶらひたまふ。まことに、みうき立たる御句作りは、うつくしき玉川主膳が、まひあふぎの表裏なく、こまかなる付ケはだへは、おなつ女郎にそふ心ちに同じ」(註6)と言う点にあると考えられる。つまり付合にあると考えられる。その「付ケはだへ」は句の評語の中に説明されている。

「清十郎ついでん」の付合は、

1、若竹だ世に離歌や清十郎ぶし

「鬼のちめ玉にも涙とはよくゆつたもさ。やっこの口でやさしくも俳諧を、清十郎が年も若竹の、世の歌のふしに云かけ、かれが妻夫のなれのはてを、事あはれにもとぶらふ百るんの巻がしらを、がいにおもしろふ、いけきもにひちちみて、棒を二本ひんなぐり申た」

2おなつの空にほゆる郭公

「此句は、心程ことはよくわたらなひけれども、かのつらゆきと云男がはきいだせし歌の序二「小町と云めらふが歌は、なよ／＼

とよむ。女の歌なればなり」と、ほちやくを、おなつ女良にめんで、すこしはほのじて、点をかけたちや。」

る短夜に星の親ちの月澄て

「時鳥ちほゆるかたを詠やれば星のおやちの月ぞ残れる」と、くせ物の歌によくあひました。」

というように評語中に説明されている。評のついてない句も多くあり、「付ケはだへ」の難解なものも多い。しかし、一句と二句では「清十郎ぶし」に「おなつ」いもせ鳥(郭公)、「お夏清十郎」、二句と三句では「郭公」に「短夜の月」(短夜の郭公)、三句と四句では「短夜の月(見)」に「端居の酌酒」(月見の酒)、四句以後では「酌酒」に「市のかりや」(市に酌酒)、「市のかりや」に「牛を引く」(牛の市)、「牛を引く」に「田をかす」(田かへす牛)、「田かへす」に「さむっこき里」(里の田里田)「さむっこき里」に「地こぶ(山)の雪」(山里)、「地こぶの雪」に「柳が陰」(こぶ柳)「山陰」柳が陰に「夕月」(月かげ)、「夕月」に「秋の螢」(秋の夕)「夕の螢」……と百韻がつづくが、紙幅の関係で次回にゆずりたい。ただ付合から生じる名詞、「お夏清十郎」「牛市」「山里」「こぶ柳」等の語を二三示すと「新発意太鼓、おかべ(豆腐)、三嶋曆、友千鳥 百性つら 恋の焼手、虫の(ねちり)ひげ、汗水 昆布の耳 くだき干語文、刀の塚(柄)、伽羅公家」がある。名詞の付合には「やっこはいかい」としての発想によるもの、「虫のひげ」(やっこ)などというものもあるが、大体において、「三嶋曆、新発意太鼓」のような世話にあるもの、連歌でも用いられるようなもの発想にもつくものが多い。しかし、追善独吟に見られるようなきわだったついでん用語は見られない。

以上語彙の総体として、世話に用いられる用語が数多く見られる点に特色があり、それが取材の自由さを示しているが、それに当然の

ことながら、連歌的用語が用いられている点にも特色がある。追善独吟のような追善的な用語が大変数少ないけれども、「やっこはいかい」としての奴詞が数多く見られるところに特色がある。ただ、「清十郎ついせんやっこはいかい」も「貝おほひ」の成立が奴詞に刺戟されてなされたのと同じように、奴詞の流行に刺戟されてきたきらいが強く、雑兵物語の語彙と性格を異にする点が大いのも、俳諧というだけでなく、作者の教養のみならず本質的な違いによるのではないかと考える。可徳は江戸の人であり、奴詞には通じていただろうが、奴詞を平常の言葉に使用していた人と考えられなく、流行語と流行「はいかい」に刺戟されて「清十郎ついせん」を作ったものと考えられる。それだけに、「やっこはいかい」および奴詞の一つの特色をよく示しているものと考ええるが、「清十郎ついせん」に用いられている奴詞と考えられる用語を奴なる者が、日常つかっていたかどうかには疑問が残る。武江年表承応三年に紹介されている山中源左衛門の辭世の句に、「わんざくれふんばるべいかげふばかりあすはからずがかつかじるべい」とあるが、この句の荒々しい発想・用語と比較しても、異質なものを感じるのである。以上稚拙な発表であるが、ご叱正を願いたい。

註1「承応から延宝にかけて主として江戸で流行した奴俳諧も注目すべきものがある。奴とは当時市中を闊歩した男伊達をいい、彼等の特殊な武張った用語を奴詞といい、その奴詞を以て賦した連句を奴俳諧というのである。「清十郎追善やっこはいかい」はその代表的なものである。一般に用語の奇抜と取材の自由は驚くべきものでその点談林俳諧に一脈相通するものがある。」(古典俳文大系)

貞門俳諧集一、十二頁——集英社)

註2「やっこ俳諧」に「玉河主膳もし(文字力)清十郎を舞ひ、扇の名残あるに一座の勘三郎名を得た「新発意太鼓」云云。主膳は中村座にありし事、又お夏清十郎の唄を舞に演じたる事を知るべし。……」(歌舞伎年表、第一巻、寛文七年、九八頁岩波書店)

註3 連歌俳諧集 八二頁 小学館

註4 “ ”

註5 “ ” 八三頁 “ ”

註6 「清十郎ついせんやっこはいかい」

(金沢二水高等学校)